

地方自治ここにあり 首長インタビュー

豊かな自然の価値を将来に繋ぎ、 地域産業振興の町づくり

古座川町 大屋 一成 町長



大屋一成古座川町長

4月24日、県下2番目に広く、清流古座川が流れる豊かな自然のまち、古座川町の大屋町長を、柳田理事と大前で訪ねました。町長は人口減少など厳しい現状を「前に出ていく」姿勢で切り開いていく決意を語られました。

町長としての姿勢と 議員時代との違い

大前：大屋町長は、町会議員から令和6年6月の町長選挙で初当選しました。行政にあたっての基本はどうですか。

町長：町会議員は16年、議長を4年させてもらいました。

私は年初めから町内の全軒を回ります。土日や最近なら仕事の合間に10軒程回って「健康にしますか」「膝大丈夫ですか」と声をかけながら「なんか困ったことないですか」という形でずっとやってきたのです。それは私の町民

の方々に対する姿勢ですね。

よく言われるのは、「2年になるけど、何も進んでないで」と、それには「事業には計画がいるから、ちよつと待って下さい」と、2年前の年度末に職員が6人辞め、採用募集をしても1人しかなくて、各課1人減になりました。私の構想では、行政には企画課が必要だと考えたのですが、新しい課は作れないと一旦保留にしました。でも、国や県の施策を引っ張って来て各課に紹介する。そういう形の企画課は絶対必要だと思っています。

大前：職員さんは何人ぐらいですか。

町長：正規職員は79人だったかな。これに会計年度任用職員が別にいます。

柳田：職員の応募がないのは、地元に残っている人が少ないのですか。

町長：古座川町は職員が若いのですよ。けれども中間層が少ない。40歳ちよつとで課長

になる。職員の年齢構成は極端に言えば「ひょろたん型」です。これは、計画的な採用をしてこなかったということだと思います。計画的に対応をしようと思っていますが、今はそこまでききません。だから、去年10月に45歳までの社会人枠で5人採用しました。うち地元は2人です。今年の4月の採用は4人ですが地元はいません。半年で9人採用したのですが、2人また辞めました。どうしても仕事で専門的に分かれて、本当は正副で補佐するのが良いのですが、個々の仕事量が多く他を手伝う余裕がないようです。

大前：町長の2年間は、議員の時と違いますか。

町長：議員の時には、町民の方に説明できないことに対して徹底的に執行部とやってきました。「100条委員会を作れ」とまで言って、忖度なしに「あかんことはあかん」と言ってきたのです。けど、町長になって、職員がいない状況の中で、きちんとなくてはいけないことも、できてないこともあります。それは管理者の責任ですが、職員を守る意味でも、状況を判

目次

地方自治ここにあり 首長インタビュー	
豊かな自然の価値を将来に繋ぎ、地域産業振興の町づくり	
古座川町 大屋 一成町長……	1
和歌山の古建築を訪ねる旅（中国文化を考える第二弾）	
日本中国友好協会和歌山県連合会事務局長 石田 文雄……	6
湯浅の未来を共に耕す	
「はぐくみ中」がつなぐ新しい人の関係	
元湯浅町地域おこし協力隊 あかねまるさん……	8

わかやま住民と自治

発行／和歌山県地域・自治体問題研究所
和歌山市太田2丁目14-9 太田ビル203号
TEL・FAX 073-488-3127
jichiken@crux.ocn.ne.jp 2026年6月号



古座川一枚岩（高さ100m幅500m「天然記念物」）

断してくれと言いたいのですが、厳しいご意見をいただくこともあります。

あとは、職員に対しては公平に対応しようと思っていいます。職務でミスとかあった時には、県などと協議する中で、きちんとした対応をしようと言っています。隠し事をしたらうまくいかないと思っています。

自然の価値の再評価と 課題は知名度向上

大前：まちづくりプランはどうでしょうか。

町長：うちは自然しかないのです。手つかずの自然、自然というの人の心を癒します。僕が議員の時に方々に行ったけど、串本、那智勝浦は知っている。太地、北山も知っている。「古座川」ってどこですか」と聞かれました。知名度がないのです。ここへ来るきつけさえあれば古座川町の価値をわかってもらえんと思っています。

昨年、東京の小学校が来て、一枚岩の前、日南川（ひなたがわ）にテント張って、川で魚釣りやエビを捕って食べた。りして2泊3日過ごしました。1週間後に参加した小学生が両親と妹を連れて役場に来たのです。「どうされたんですか」と聞けば、自然の中で過ごして帰ってきて「目をキラキラしながら話をするのだ」と。それで、家族で来たと言うのです。普段自然のないところで遊んでいる中で、この大自然の醍醐味を知った時に、

子どもの心に残るものがある。そういうことがやっぱり大事だと思っています。

歴代の町長の中には企業誘致をしたと言われた方もおりましたが、なかなかできないものです。そういう中で、自然を生かして、あとはコッソリやけど、ここに残って地域の地場産業を発展させていく。そこが一番大事だと思っています。

大前：今日のために古座川町を調べたのですが、高知の四万十川のイメージと重なりました。

町長：四万十川と同じような潜水橋もあって、落ち鮎の時期に行われる鮎の火振り漁は、夜間に灯りで鮎を網に追い込む漁で全国でも四万十川と古座川の2つだけです。僕は火振り漁もしたし、小鷹網（こたかあみ）と言って、瀬にササを立てて落ち鮎を回らせて、そこへ幅60cm、10m程の細長い網を投げて鮎を獲っていました。うなぎやエビを獲るなど、子どもの頃から川や山が好きでした。

大前：過疎高齢化はどの町も大変ですが、人口はどうですか。

町長：人口は2200人を切っていて、2100人台になってしまいました。

人口減少に関しては、自治体どうしの取り合いになっているのかと思っています。この間、和歌山の若い国会議員の方に言ったのですが、根本的に日本の人口が増える形にしてほしい。今は一時的に、外国人の方とか70歳まで働くとかはありますが、40年先を見たら日本が存在するのかわからないところまで来ている。年間何兆円でも予算を入れるべきだと。

しかし、うちでも若い人が来てくれる施策をせなあかん。対策の一番は住宅になると思っています。古座川町に来た人がいるが住むところがない。空き家があるが、家財を置いていけるので家を貸してくれない。それで、空き家を調べようと高池地区全戸を調べ、固定資産税の通知に「貸しても良いという方は連絡ください」のチラシを同封しました。また、区長さんにも空き家の情報提供をお願いしました。

空き家を安く町に譲ってもらうとかして、それを改装して、移住者に安く賃貸する。

10年程で借主に無償譲渡を考えています。まだ進んでいません。

柳田：さつき車で来たら、町営住宅を見かけたのですが、何戸かあるのですか。

町長：川口地区の道沿いに町営住宅と診療所や健康福祉課があるのです。公営住宅は収入によって家賃が決まるのですが、自分で作つたらもっと自由に家賃設定できると思っています。あと、公営住宅は下の高池地区や明神地区にもあるのですが、結構古くて建て替えないといけない状況になってきています。難しいと思いますが、県に県営住宅を作ってもらえないか相談に行きたいと考えています。

能登震災を踏まえた

防災対策

大前：町長就任時、新聞インタビューで、地震対策や災害対策を強調されていましたが、町長：能登震災を見ると、道路が復旧しないと、救助や復旧作業が進まない。古座川町も地震の時には、奥地は山が急峻で必ず道路の寸断があらちこちでおきます。そのために



ポットホールが並ぶ滝の拝（小川地区）

建設機械リース会社2社と災害時に優先的に機械を貸してもらった協定を結びました。そして町内にリース営業所を開設する事になっています。あとは古座川の土木組合とも協定を結んで災害時の緊急復旧工事に対応してもらうようにしました。

もう一つは、国土強靱化の中にある防災公園。仮設住宅用地や、ヘリコプターの緊急時の発着もできる防災公園を作りたい。診療所の前の山を削って埋め立てると5000坪位出来ると思うのです。そこが避難所となったら、前に診療所があつて、緊急時にはこれで対応できる。今は構想

だけです防災公園を造りたいと思つています。

平成23年の大洪水では、月野瀬の宿泊施設「ぼたん荘」の前の道は、1m50、2m近く浸かったのです。まあ、百年に1回、50年に1回と言われるけど、来たことは確かなので、僕はそれを基準にして、いろんな対策をたてないといけないと考えています。

柳田：津波は古座川を遡って役場まで来るということはないのですか。

町長：役場までではない。この下流には町立古座中学校があつて、グラウンド近くまで浸水するとなっています。そこから役場は結構上がつてきて

いるということです。

浸水地域なら古くなった庁舎の建て替えに緊急防災・減災事業債が使えるのですがうちは使えない。近隣町ではそれで庁舎の建て替えをしています。地方債の担当のところへ、「津波だけが災害でないのだから、うちは洪水もある事業債が使えるように拡大してほしい」と担当課と行つたのですが、簡単にうんとは言えないようです。

医療と公共交通、 教育の現状と課題

柳田：古座川町は面積が広くて、集落が点在しているの

すか。

町長：田辺市が合併するまでは県下1の面積でした。集落は山の中に点在します。

一世帯しかない区もあります。私が知っているだけでも3つの区がなくなつた。それも仕方のないことですが、特に滝の拝のある小川地区の奥、西赤木、田川、小森川とあるのですが、西赤木で1人、田川で5、6人、小森川で1人と、小川の奥は8人ぐらいしか住んでない。それでも行政サービスは欠かせません。

公共交通は、幹の部分「ふるさとバス」で毎日運航していますが、枝の部分になると自転車などで出てこないといけない。地域へ行つた時に、「帰りの時間帯にバスが無いので、私は自転車で雨の中添野川から佐田まで来たのです」と、すぐ枝の集落が多すぎるので、公共交通のやり方も考えなあかん。各区で送り迎えしていただいて、その中で町が補助を出すとか、そんなことができないのかと思つています。

柳田：先ほど言つていた診療所は、常駐のお医者さんがいるのですか。

町長：診療所は明神と七川診療所、三尾川と小川にへき地診療所があります。明神診療所は常駐です。七川診療所は3月までは常駐で田辺から通つていたのですが、県の医師派遣が拠点病院からの派遣に変わつて、串本病院に派遣した上で、そこから委託という事になりました。担当課といういろいろ検討する中で、診療日は一緒ですが、診療時間が少し減りました。

柳田：田舎だったら医者はなかなか来てくれないと思うのです。入院や病気によっては、新宮や串本の病院に行くのですか。

町長：診療所で受診して、多分田辺の紀南病院などに行くのが多いのかな。きちんと調べてはないのですが、田辺までは車で1時間半ぐらいかかります。

柳田：学校は、小学校が3校、中学校が2校ですか。

町長：三尾川小学校は奥地で子どもが少ないのですが、七川に住みたいという人も出てくる。その中で、最後まで小学校はおきたい。ただ、明神の小中学校に関しては、なんとか一つにしたいなと思いま



保健福祉センター、明神診療所、右は町営住宅（川口地区）

す。一つの学校で、町の負担は、年間2千2、300万円になります。2校で5000万円近くになる。その分を高校や大学進学、就職時の例えば支度金、一時金という形で30万円ぐらい支給したい。それと毎月3万の奨学金を今は貸与やけど給付したい。奨学金は社会人になって半年ずつ払っているけど、足かせになっている事も多いと思うの

で、子育て支援の一環として考えたいと思っています。

柳田：学級編成はどうなっていますか。

町長：複式も多くて、県教委から先生の数が減らされてくる。それで、町が独自で支援員を雇う。学校があることは地域の力であることはわかるのやけど、うちの子どもたちの活動の中で、同級生をいっぱい作って、みんななどと思っ

たのやけど、保護者や地域に理解してもらわないと難しいと思います。

柳田：通学の距離が長い、面積が広いから。

町長：それが課題で、通学バスで行かないといけません。

柳田：町長はそういう方向へ行きたいけれども、住民が今のところはなかなか納得していただけない。

町長：最終的には僕の決断も必要だと思っていますが、所管は教育委員会やから、教育長をはじめ担当が話し合っています。

地場産業の再生と振興

大前：道路沿いにハチの巣がいっぱい置いていました。

町長：日本ミツバチのゴウラを置いています。以前は宮内庁に太古の蜜という形の中で、古座川の奥の蜂蜜を献上したという文献もあるのです。

それを復活させたいのですが、何年か前からハチに寄生するダニが蔓延して、絶滅を心配する位まで減ってしまった。東京の玉川大学ミツバチ研究所の教授に、「古座川町ではハチが減ってきて、大変なのですよ」と言ったら、「心配

ないです、必ず復活します。長野県も同じようになりまして、時間が経つと抵抗力も出て復活しました」と言ってくれました。現状は、ハチの入ったゴウラより空のゴウラが倍位あります。ハチは春に分蜂をします。僕も、家の近くでみつを獲りたいと思っ

て、ゴウラを掃除して、金綾辺（きんりゅうへん）の花を置きますがなかなか入らない。1度入ったのですが、黒いハチがいっぱい来て日本ミツバチがどこかに行ってしまう

した。観光の一つとして、日本ミツバチのゴウラを自分達で作って、そこへ入ったらマイゴウラで、この蜜はあなたのも

のですとかいう、そんな体験的なことを出来ないかなと思ったりします。

Ｉターンの方が、ふるさと納税の返礼品として、蜂蜜を出しています。返礼品の中では一番高額で、以前に優良県産品のプレミアム和歌山まで認定されたこともある品物です。

柳田：ゆず平井の里はやってるみたいやけども、ユズはどうですか。

町長：農業法人ゆず平井の里は、8000万円から1億円ぐらいの売上で頑張っていると思います。あとユズに関しては、3つの農園が出しています。楠地区の農園では、「ポツンと一軒家」で実生（みしょう）柚子が紹介されて有名になっています。この3つの農園が酒造会社に出荷して、会社は15トンまでは引き受けると言っています。今は7トンしか出荷していません。

先日、古座川果樹研究会というのがあるって、ユズの栽培を増やし耕作放棄地をなくす取り組みに、補助金とかを上げてくれないかと言ってきました。そこでは組合員が3人

増えて11人になって、月野瀬のあたりを全部ユズにしようと言っています。ユズは2年苗を植えて、収穫に7年ぐらいかかるから、その間は大変です。でもユズはまだまだいけます。

古座川で推奨産品は3つあるのです。センリヨウとユズ、しきび。センリヨウは病気とかあつてかなり減ってきました。しきびは、「香の花」と言ってます。僕は東京の大田市場で社長としてきび担当の人と話して、出荷が出来たらうちで受けまうと言ってくれる。うちのしきびは、良い木があつて、切つてちよつと束ねたら、炎のような樹形になるのです。そんな木を挿し木で増やして、それを専門にしている農園は2、3町しきびをやっています。

大前：田のフェンス囲いを見たのですが、獣害はどうですか。

町長：夜の8時から9時ぐらいに家に帰った時に、フェンスの外でシカがたむろしている。それはお尻の真つ白い小さなシカが多い。シカも鳥獣害で獲って活用しています。「山の光工房」というジビエ



古座川ゆず平井の里事務所（平井地区）

加工場があつて、ジビエ肉とかソーセージとかで年間100万円ぐらゐの売り上げがあります。品質管理のため撃つてから2時間以内に持ち込むという条件を決めています。それで山の上で獲ったら持つてこれないのです。2時間を越えた時に、そのシカを、例えばペットフードへの加工も考えないといけない。今も一部はジャーキーとかの加工に取り組んでくれたりしています。

大前：ジビエ加工場は町で作ったのですか。

町長：その頃は先進的な取り組みでした。今は、結構あち

こちで出来てきているのですが、持ってきた獣の毛をバーナーなどで焼き、高圧洗浄して皮は室外で剥いで、ラインが流れる形の中で衛生的に処理しています。

柳田：加工はシカとイノシシですか。

町長：シカが多いですね。イノシシもあります。

柳田：サルはどうですか。

町長：サルは、2年前位に、2、30頭の群れを捕ったのです。この高池地区でもサル来ないと言っています。うちの近くでも来ません。以前は家の前まで平気で来ましたが、サルは減りましたね。

柳田：しきびとかはあるようなけど、野菜類はほとんどないですね。

町長：潤野地区で、県営の圃場整備を行っています。6億円位の事業で、一つの田んぼを2反平均で整備をしています。費用は国と県がほとんどで受益者はいらぬのです。

町長：7・5%、5000万円弱で、あとはやってくれます。これは水稻が基本なのです。これだけ米が余ってきたり高かったりするなかで実際に売れるのが心配です。それ

を野菜も作れるように国へ要望とかしないといけないかと考えています。

柳田：耕作放棄の田んぼも多いのですか。

町長：月野瀬地区ではいつも作れるような形で、草ぼうぼうではないです。ほとんどきれいに刈っています。そこへさつき言つたユズを植えていけばと思っています。

あと、地域おこし協力隊は、今は2人と少ないのですが、任期は3年です。3年では高齢化率50%の自治体では、なかなか自立できない。それで7年にしてくれないかと、僕は令和6年に総務省に要望しに行きました。先日、県の市町村課長が「町長、町の意向で5年になる場合もありますよ」って言ってくれて、国に声を上げていかなあかなと思ひました。

トップセールスによる

振興政策

大前：ふるさと納税にも力を入れていますが。

町長：ふるさと納税は、昨年の9月にポイント付与がなくなつてダウンしたのです。そ

こまでは前年より多かつたのですが寄付が集中する12月にいったんに來なくなりました。うちは、目玉となる返礼品が少ないので、北海道大学の演習林を活用した、演習林をトロコで走る体験型とか、そういうのを考えないかと言っています。和歌山県の共通返礼品が多い中で、ユズの商品に期待しています。

柳田：高速道路はどこを通るのですか。

町長：高速道路は、古座川鉄橋の50m程上流の予定です。

また、古座川町のインターを要望してきましたが、古座川町の土地が狭くインターを造れない。川向かいの串本町古座に古座川インターを造ることになりました。そこへ直通できる道を計画し、橋の設計とかを行っています。町は関係する地区に説明してなかつたので「聞いてないとか、初めてや」とか言われて説明に行きました。しかし、新設する橋の橋脚で洪水になりやすいので「反対だ」と言われる人もいて、それに対応した設計をお願いしています。

大前：あと町長、これだけ言っておきたいというような

ことがあれば。

町長：さつき言つたように、古座川町を知ってもらえるようにしたい。東京に在京和歌山県人会があつて、2年前から総会に行つて町のことをPRしています。「令和6年度は子どもの出生が0人、7年度は2人。そういう中で、古座川町は、自然しかないけど自然を生かしたまちづくりをしていきたい。もし東京で、心が折れるようなことがあつたら、心をいやしに来てください」と。

古座川町のために、トップセールスで僕は前に前に出て行かないといけないと思ひています。あと、古座川町を応援してくれる企業の方にも、企業版のふるさと納税をお願いしてきました。僕が企業に行つていろんな話をして、こいつやつたらとか、古座川町を応援せなあかんとか、そんなことが私の役目だと思ひるので、それをやって行きたいと思ひています。そういう思ひが一番強いですね。

大前：町長の故郷に対する率直な思ひを聞かせていただいたいと思います。お忙しい所、ありがとうございます。

和歌山の古建築を訪ねる旅 (中国文化を考える第二弾)

日本中国友好協会和歌山県連合会事務局長 石田 文雄



石田文雄氏

日本と中国との歴史的なかわりを学び、日中友好を深めようと、和歌山の浦の古建築を訪ねる催しが5月9日(土) 盛況に開催されました。主催の日本中国友好協会和歌山県連(以下、日中友好協会)の石田事務局長に投稿いただきました。

はじめに

昨年11月に高市首相が「台湾有事は日本の存立危機事態」と答弁して以降、中国政府が激しく反発し、次々と対抗措置をとっている。日本と中国の緊張状態は最悪の状況が続いています。この事態は日中友好運動にも大きく影響を与え、しかも長期化する兆しを見せています。このことは、日中共同声明(1972年)など過去の両国関係の平和構築の努力を踏みにじるもので、解決には高市首相の発言を撤回する以外に方法はありません。

日中両国は、1972年9月、国交正常化にあたり日中共同声明に調印しました。日本側は第2項で「中華人民共和国政府が中国の唯一の合法政府であることを承認する」とし、第3項で台湾の地位について「中華人民共和国政府は、台湾が中華人民共和国の領土の不可分の一部であることを重ねて表明する」と明記しています。さらに、第6項では「日本国および中国が、相互の関係において、すべての紛争を平和的手段により解決し、武力又は武力による威嚇に訴えないことを確認する」と書いています。これが日中間でこれまで何度も確認した政治的立場であり、今回の高市発言は明らかに日中共同声明に違反するものです。

中国文化を考える 第二弾、和歌の浦の散策

現在の日本には、多くのものが中国由来です(その最大

のものは漢字)。特に、日本の伝統文化のほとんどは中国起源とするもので、日本の寺社建築は、奈良時代以降数多くが重要文化財として残されています。

中友好協会では、その第一人者である鳴海祥博氏(文化財建築物保存技術者・日中友好協会会員)の協力を得て、昨年1月に「中国文化を考える会」を開き、中国文化を代表する二胡の演奏や「日本の寺社建築の源流が中国江南の古建築にある」という講演をして頂きました。

これはとても好評で、参加者から次回の企画を期待されました。今後は鳴海氏の著書である「和歌山の古建築を訪ねて」をシリーズに、和歌山県内の中国由来の古建築を見学する企画を予定しています。

その第二弾の今回は、和歌の浦の散策として、観海閣と海禅院多宝塔、紀州東照宮、和歌浦天満宮を訪ねました。5月9日の当日は、和歌山大学の留学生6名を含めた



あしべ屋妹背別荘でのガイダンスの様子

古建築愛好家など60名が参加してくれました。まず参加者全員が玉津島神社の対岸にある「あしべ屋妹背別荘」(明治後期には貴賓館として使われていた建物)に集まりました。県連副会長の幡川文彦氏の歓迎あいさつで、この和歌の浦の地が、中国革命の父である孫文と植物学者の南方熊楠とが再会したゆかりの地であることを紹介しました。そして、ナビゲーターの鳴海氏に本日の見どころをプロジェクトでガイダンスしていたいただきました。この和歌の浦の風景が中国杭州の西湖に似ていることから、それを模した



天満宮楼門での説明

次に、徳川家康を祀る紀州東照宮を訪ね、全員で記念写真を撮りました。
この社殿は162

と片男波に通じる不老橋が見え、対岸の玉津島神社からこの妹背山に架かる中国風の三断橋と、中国の西湖を観るような風景を体感することができました。古代の人々がいかにか中国の文化を学んでいたかがわかります。

説明後、まず今年3月に復元工事が終わったばかりの観海閣と紀州徳川家の初代藩主である頼宣が、亡くなった母

中国文化漂う 和歌の浦散策

石橋（不老橋・三断橋）や建築物など多くが中国由来であることなども話されました。このガイドは、参加人数が想定以上に多く、見学先での説明が難しいと、急遽あしべ屋妹背別荘で行いました。しかし、結果的には、これがとても良かったと好評でした。

「お万の方」（法名 養珠院）の菩提を弔うために建立した海禅院多宝塔を散策しました。1655年（明暦元年）に建立された多宝塔には15万個の小石に経文を書き写した「経石」が埋蔵されていることなどの話を聞きました。さらに、多宝塔を囲む石の玉垣は、大きな石から切り出して基礎と柱、抜きが一体で作られていることに、当時の職人さんの技術の高さにも注目してほしいと力説されました。

小高い妹背山の頂上に案内されると、東に紀三井寺、西には東照宮、南には和歌浦湾と片男波に通じる不老橋が見え、対岸の玉津島神社からこの妹背山に架かる中国風の三断橋と、中国の西湖を観るような風景を体感することができました。古代の人々がいかにか中国の文化を学んでいたかがわかります。

次に、徳川家康を祀る紀州東照宮を訪ね、全員で記念写真を撮りました。この社殿は162

1年に徳川家康の十男頼宣によつて造営されました。鳥居から青石が敷き詰められた石畳の長い参道を行くと108段の石段に辿り着きます。その上には、丹塗りと彩色に彩られた楼門が建ち、その直線で構成された長い参道や石段には近寄りたがたい徳川家の威厳を感じさせるものがあります。毎年5月の「和歌祭」にはこの石段を御輿を担いだ男衆が勇ましく駆け降りるそうです。楼門をくぐると視界が開け、正面には一段高く唐門と瑞垣、そして、その奥に社殿の屋根が見えます。社殿は正面に拝殿、その奥に本殿が建ち、それを「石の間」と呼ばれる部分で繋いで一つの建物にまとめた複雑な形態のもので、これを「権現造り」といい、江戸時代には徳川将軍家と御三家のみが独占した建築形式のようです。

それから、最後の訪問先である和歌浦天満宮に行きました。ここは御祭神の菅原道真公を祀る神社です。現在の社殿は、関ヶ原の戦いの後、和歌山の領主となった浅野幸長が1606年に再興したものです。のちに、徳川頼宣が入

国し、浅野家は広島へ移ることになりました。

天満宮の見どころを鳴海氏は、高い石垣の上にある楼門、廻廊の建つ構成は正に城郭建築を思わせるところにあるといい、下から見上げるとそれは実に壮観です。本殿には様々な彫刻と彩色によって飾られ、安土桃山建築の特徴を出しています。この天満宮の造形を作り上げたのは根来出身の太田吉政・正信（父子）です。その彫刻のモチーフには中国由来の故事などが多く用いられています。「龍」の彫刻は、中国皇帝は龍の子孫とされるといふ権威を現わし、「猿」は悪夢を食べ、良夢に変える霊獣、また鉄を食べる霊獣とされ、武器のない平和な世の中を象徴されています。浅野幸長の太平の世を目指す特別な思いを、中国故事を用いて現わす職人の知恵と技術には大変驚かされ、感動しました。

日中友好運動の これから

日中友好協会は結成以来75年余の歴史があり、その歴史

は困難の連続であつたともいえます。そして今回の危機的状況は日中友好運動にとつて決して初めてではありません。1966年から文化大革命による弾圧（協会本部が直接襲撃された善隣会館事件）があり、1998年6月の日中両共産党関係正常化を受けて、やつと協会も同10月に日中国際交流協会との協定により日中友好運動が正常化しました。そして、2000年からは、和歌山県連・海南支部がともに数次に渡り日中友好平和の旅（訪中団）が開始されます。和歌山県連では、しばらく中断していた日中友好平和の旅を再開し、今年の9月には山東省へのツアーを実施する予定です。



湯浅の未来を共に耕す 「はぐくみ中」がつなぐ新しい人の関係

元湯浅町地域おこし協力隊 あかねまる さん



あかねまるさん

湯浅町の地域おこし協力隊として、社会教育、イベント開催に取り組み、3月末の卒隊で、複合私設「はぐくみ中」を立ち上げた、あかねまるさんに思いをお聞きしました。

湯浅との縁と活動の原点

私は和歌山市出身で、学生の時にまちづくり活動や地域活性化のイベントをしていました。その時に湯浅の人と知り合って、よく遊びに来ました。みかん狩り、伝建地区の行灯、湯浅まつりのビヤガーデンなど思い出の場所です。卒業後、尼崎市のNPOで障害福祉事業とコミュニティスペースの運営をしました。4年で和歌山へ帰ると決めていて、やめる年に湯浅の人から地域づくりをサポートする、社会教育の地域おこし協力隊に応募しないかと言われ、2023年4月に移住し活動を始めました。

私は、社会教育は公民館活動とか子ども向けの活動だけでなく、もっと広い活動だと思っています。地域の魅力発信や、交

流・コミュニケーションを深めるイベントも、ただ遊ぶのではなく、社会の理念を意識しながらやってきました。若い子が学生とかのうちに、いろんな大人に出会って、未来の選択肢を増やしてほしい。そのために、大人が地域の中で表現する。遊べる場所を作る。大人が楽しく、若者と出会える場所を作ること、で地域の力がつくと考えています。

魅力発信や交流を深めるイベントを開催

活動は、イベント開催が中心で、年間30以上、月5回程度のペースで行っていました。「防災キャンプ」は1泊2日で、小学生50人ぐらいで、地域の人や学生もボランティアで参加してやりました。また、駅前の「なぎ広場」で、大きめのビアフェスをやって5000人ぐらい来てくれました。1月7日にただ七草かゆを食べるイベントは「グリーンソサィティ」の皆さんと一緒にやりました。田村漁港での「港のマルシェ」では結構有名なお店を呼んで700人を集め、地元の人には「漁港がこんなに綺麗だとは思わなかつ

た」と言ってくれました。2年前から駅前で月1回の社会実験「湯浅駅前コミュニティ屋台プロジェクト」で屋台を出しています。いろんな人が来てくれます。集える場所を作ろうと、協力隊の卒隊に向けて、複合私設「はぐくみ中」を作りました。

賑わいの創出と「居場所」の「はぐくみ中」

地域の中で、はぐくみ、はぐくまれる関係を作っていきたいと思っています。ここは中高生などの子どもたちの居場所や、月1回開催する「子ども食堂」、仕事場としても使えるワークスペース、昼間はランチとカフェ、夜は居酒屋、空き家や移住相談の窓口にもなっています。週4日（水木金土）開いて、日曜はイベントの場所貸しをします。5月は湯浅町出身のアーティスト「みつはしそーた」さんの原画展を開催しています。

若者が戻りたいと思える町に

湯浅町はコンパクトな町で人口も1万人ちょっと、都市の利便性と田舎の魅力が共存し、すぐ可能性を秘めた町です。ただ、一番欲しい30代、40代が極端に少なく、このままでは将来的にコミュニティに大きな穴が開いてしまう危機感を持ってい



「はぐくみ中」の店内

ます。

若い人が、大学進学とかで一度町を出ても、地元の魅力を知って「戻りたい」と思う選択肢を作ることが大事だと考えています。ここで、大人との関わりで、自分で仕事をする感覚を得られて、このまちに住む理由を少しずつ増やしていければいいなと思います。

オープンマインドで町の人たちが、表現ができるような町になればいいなと思っています。「こんにちは」とだからとも言えるまちづくりをしないと、関係人口も観光人口も増えない。結局は人だと思っています。湯浅にはおもしろい人や、お節介りな人も多いと思っているので、可能性は無限だと思っています。